ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

山一、合掌
（最後の株主として）

先月２６日、山一証券の破産手続きが終わった。法人登記も近く消滅するようだが、結局、日本銀行が山一に行った特別融資の内、回収不能額は１，１１１億円で確定した。この金額は取りも直さず山一の最終債務超過額に他ならないが、そのまま国民負担となって跳ね返ってくると云う。この最終確定額が見込みより多かったのか、あるいは少なかったのか知る由もないが、これで私の持ち株も完全に紙切れとなった。

私は、破綻後に整理ポストで取引されていた山一証券株を取引廃止前日に１株２円で１０万株ほど買った。馬鹿だなと思われるかもしれないが、半分は「もしかしたら資産超過で株主への精算配当があるかも」というスケベ根性で、半分はある種の思い入れで思わず買ってしまった、というのが本当の所である。

購入後届いた株券（１０００株券で１００枚）の裏書きは株式の来歴を語っていた。個人あり、銀行あり、有名企業あり、あるいは個人法人が連鎖する裏書きもあった。この１０万株がピーク時には３億円を上回る価格で取引されていたという事実は、２０万円で手に入れた私を含めた投機人の浅ましさを嗤っているように思えた。

山一証券は私が勤めていた銀行の幹事証券だった。銀行には、山一証券の本部支店を含めたくさんの人がやって来た。私自身、銀行の投資勘定の資金運用担当だったこともあり、山一の人とは毎日のように会っていた。勿論、他の証券会社の人達もたくさん来たが、幹事証券だった彼らの精勤度は群を抜いていた。

私がエイヤで山一最後の株主になったのには、そんなこともあったかもしれない。

しかし、言い訳するのではないが、私は当時「山一破綻はあるかもしれない」と思っていた。だから、山一破綻後、紙切れになった株式を保有する山一の社員の悲鳴はどこか虚しく聞こえた。破綻時の野沢社長の涙のシーンにも違和感を覚えた。「証券マンが本当に知らなかった」ことが不思議に思えたのだ。他人に将来を予測して証券投資を勧める者が足下で起こっていたことを知らなかった？悪いジョークではないか、そう感じたのである。

しかし、今思えばそれも的はずれだった。破綻山一はその後の金融証券市場の変革を担う人材供給源となったからだ。

山一は何故破綻したのか。トップの決断力不足、企業統治の欠如、等いろいろ指摘されたが、それはその通りなのだろう。しかし、長期的視点で見れば、山一に代表された旧い形の証券ビジネスが終りを迎えていたことを先取り的に現していたと云えるような気がする。私が銀行内で山一と行っていた関係性を重視した証券取引が行き詰まっていることを体現していたのだ。それは、同じ９７年１１月の北海道拓殖銀行破綻と根っこでつながっていた。銀行でも旧い形の銀行ビジネスが終焉を迎えつつあった。

山一はその精算に７年の年月を要したが、この間に日本の証券界の勢力地図は大きく変わった。それを象徴するのはネット証券の台頭である。

９７年頃は殆ど影も形も見えなかった松井証券が昨年９月中間期で経常利益５位に躍り出た。その他にも、イー・トレードが１３位、マネックス・ビーンズが１４位、カブドットコムが２０位、楽天証券が２２位とネット専業の躍進が目立ち、従来の対面営業を主体とする既存証券は総じて低調だった。そして、皮肉にも松井証券の役員の半数は山一出身者であった。

以前にも書いた記憶があるが、９７年１１月は日本の金融史に残る年月となるだろう。１００年の歴史を持つ日本最古の証券会社と明治時代の北海道開拓に起源を持つ銀行が同じ月に相次いで倒れたのだから、その衝撃は計り知れないものがあった。

新聞によると、最後の会見で野沢元社長は「山一証券の精神、魂、遺伝子は残していきたいし、残っている。この火を消さないように元社員は与えられたそれぞれの持ち場で誇りを持って頑張って貰いたい」と述べたという。微妙な言い回しではあるが、想いは込められている。これを聞いた山一マンには感慨深いものがあったと思う。その胸に去来するものが何であったかはそれぞれが知るのみであるが、単なる紙切れとなった一束の山一株式を抱えたまま私の中の山一物語も終わりの時がきた。合掌。

《複製・転載等はご連絡下さい》

TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp